

計画の主旨—町家再生の手法

今井町は、その間口の広さ、商家と長屋の混在、環壕と背割り、東西軸と南北軸の使い分けなど、きわめて個性的な町である。なかでも長屋は町並み景観を構成する大きな位置を占めており、町並みの崩壊は長屋からとさえいわれている。
町家の再生は今井町にとって永遠のテーマであり、時代に応じた積極的な多目的の活用が町並みを崩壊から守り、付加価値を生み、生活の場として生かす最も有効な手段である。

隙間なく密集した町並みの中で、退化してしまったこの長家住宅の閑息した迷路空間を、町家が持つ重要な要素「格子」「通りニワ」「つぼ庭（うら庭）」を利用して町家に不足している「光」と「風」を取り込み、動線を整理し、ゾーン空間を分けながら結びつける。また今井独特の「環壕」・「用水」・「背割り」の「水」を取り込み、今井でしか出来ないレストランを計画する。概要を次に挙げて行きます。

■「通りニワ」と「つぼ庭（うら庭）」

この長家住宅に不足している重要な要素。「通りニワ」は空間を分けながら、結び付け全体を貫き「つぼ庭（うら庭）」に至る路地空間。すべてのゾンスペースが「通りニワ」に接し、動線の大動脈となる。今回の計画で、建物の一部を切取った空間「つぼ庭」は1階・中2階・2階すべてから望むことができる光と水と緑の「中庭」。「前壕」から「通りニワ」の水路を通して「つぼ庭」に至る「環壕」を模した水辺は、今では水を感じなくなった町並みに、かつての水郷を想い起す仕掛けでもある。

■「用水」・「背割り」

多くが各地の町家と共通する中で、今井町独特の「用水」「背割り」は計画し避けて通れない。「環壕」も含め、町と水の関わり方や、家・裏庭に引入れて利用する水との付き合い（親水）はむしろ町を形づくる重要な要素である。前壕に用水と環壕の意味をもたせ、つぼ庭に背割りを設けて通りニワ脇の水路と南庭の側溝で水を循環させる。

■「平入り」「格子」「むしこまど」

居住ではなく不特定の人々が利用する「みせ」ゆえに内部を外に、より透かして見せる必要がある。店内から見る「おもてみち」にもはや風情は無く、キョリをおいて見せる、または閉じながら空ける「格子」「むしこまど」は食空間を包むのに適している。「平入り」が瓦屋根・格子・むしこまど等、町家の持つ水平のラインを形づくる景観の原点であり、軒の連続の中でどれだけの内部空間を持てるかが「みせ」の繁栄に繋がる。「格子」「むしこまど」の内部のその奥に光と水と緑の「中庭」が透けて見える。

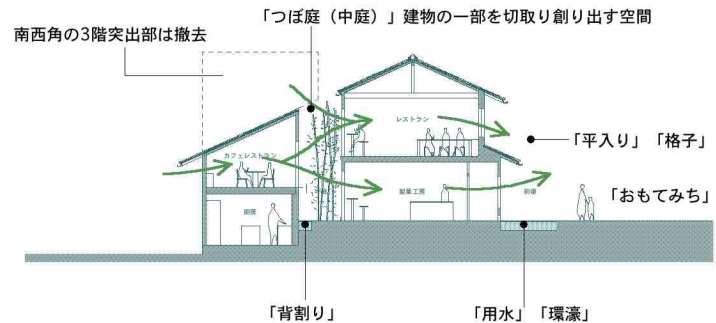
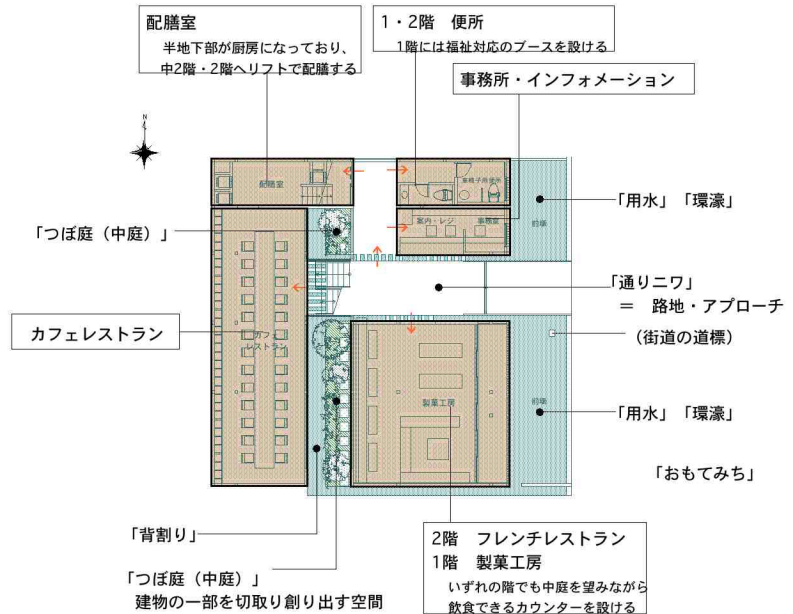
■「光」と「水」と「風」

町家は高密度・密集の都市型住居であるために、これまで光と水と風を取り入れる工夫が多くなされてきた。「格子」「つぼ庭」「通りニワ」はその必須3大要素であり、町家をかたち創る大切なキーワードである。「平入り」は町家の基本であり、軒・スカイラインの連続が町家景観をつくっている。これらに今井の「用水」・「背割り」の親水を取り入れた計画が今井にしかないレストランとなります。

町家は多機能な生活空間であり、多目的に活用できる路地カル・スペースである。

退化の一途をたどりながら、急速な時代の変化の中で、逆に崩壊寸前でその価値が見直されてきた町家は無限の可能性を持つ「遺産」でもある。

「おもてみち」「通りニワ」「つぼ庭（うら庭）」「用水」「背割り」は町家景観の主役のようにみえて、実は名脇役です。それらが繋げて包み込む空間こそが豊かな町家空間を創り、町家を最大限生かし、再生させる手法となるはずだ。



構造：町家の開放性を維持しながら耐震補強をするには、木材の仕口のネバリ補強、格子組みのネバリによる開口補強、貫・添え柱による補強、土塗壁・しっくい塗壁の耐震性を組合わせた「伝統的建造物耐震補強」を用いる。

1/5

設計主旨

SCALE 1:200
DATE 03.09.10

今井町家
再生計画

072